地域の"まなざし"から
光る子どもたちが生まれた。

今、日本で一番大切な映画。

これは、実際にあった 荒廃からの真実の再生物語りである。

「イジメる奴も嫌いだけど
何もしなかった先生、
親も大嫌いだ！」

新制中学校制定50周年記念作品
日本PTA創立50周年記念作品
稚内市制施行50年記念作品

文部省選定
文化庁優秀映画
上映支援作品

斎藤耕一監督作品

稚内発

学び座

ソーランの歌が聞こえる

渡瀬恒彦・安達祐実・徳山秀典・小島　聖・誠　直也｜田村高廣｜ガッツ石松・渡辺裕之・増田惠子・田中好子

●制作にあたって

製作　齋藤　浩
　　高橋松男

映画には、果たさなければならない使命がある――と、私たちは考えます。これまで、「人間」、そして「愛」をテーマとし、「ビルマの竪琴」、「鼻子は、今」、「次郎物語」、「留川」、「人間の約束」、「一杯のかけそば」など、私たちは常に、心のふれあいの大切さ」を世に問う映画を製作してまいりました。

人間の心には、身体と同じように「いのち」がある。その「心のいのち」は、誰も、まして一人では育てられないもの。だから、「心の喪失時代」と叫ばれて久しい今こそ、人と人がふれあい、学び合う、そんな「心の環境」こそが大切なのだ――と、私たちは考えるからです。

しかし今、子供たちは、そんな「心を育くむ場」を大人社会から奪われている。子供たちの心は凍え、喪えながら「心のいのち」の学びの場を求めている。そんな思いにかられつつ、この問題を映画で世に問いたいと願っておりました。私たち大人が、本気でこの問題に立ち上がって欲しいからです。そして、そこから、子供たちを中心に、大人たちがそれぞれの立場を認め合い、学び合う、地域ごとの輪が生まれて欲しいからでありました。

そして、私たちは、椎内市のある中学校に出会いました。「親と子」が、「先生と生徒」が、本気でぶつかりあい、悩みあいながら、すばらしい「学び合いの環境」を築き上げた学校。まさにそれが、椎内市立「椎内南中学校」だったのです。

そのとき、私たちは溜息いたしました。学校ごと、地域ごとに事情は違っても、きっと、この学校の「学び屋の心」こそが、何かを今、日本で一番大切なこと、なのかを、全国の大人たちに思い出させてくれるに違いない――と。

たった一人の光る子供の陰には、地域の大勢の大人たちの輪が必要です。そんな思いで結ばれた本気の輪が、映画「学び屋上映運動」を通して、一つでも多く生まれて下されば、これにまさる喜びはございません。地域ごと、学校ごとに、お一人でも多くの皆様方のご参加を、謹んで、心よりお願い申し上げます。

●今、心の時代

プロデューサー　萩原正夫
　　古屋和彦
　　野辺忠彦

父や母の時代には、貧しくとも、心のふれあいの環境があった。しかし、今、そのふれあいの場が失われ、そして、中学生問題で、日本社会全体が衝撃を受け、深く傷ついている。

人は生まれ、生き、そして一生を終える。その人の心とは、他人の心とのふれあいによってこそ、一生成長し続けることができる。

そのふれあいの場が失われて、子供たちは、肉体の痛み以上の心の痛みに泣いている。その痛みの癒り、自己を、他者を慈つけ、さらに心の傷を深めて行く。そんな子供たちの心をのぞき見ることによって、明代日本人全体の心の傷を抱き、心の環境のあり方を問いかけたい。

●監督メッセージ

監督　斎藤耕一

三年前、この椎内南中学校の所頃「南中ソーラン」にまつわる話を聞いた時の衝撃と感動は今でも忘れられない。

当時校内暴力で日本一荒れていた学校として、北海道だけではなく、全国的にも知られていた中学校。その生徒たちが踊る「ソーラン節」が、何と全国規模で行われるプロアマ問わずのコンクールで日本一のグランプリを獲得したのであった。当然の事ながら学校全体の荒れた風潮もその過程で次第に回復し、南中は立ち直った。

当時この経緯の直接関係者というより、「南中ソーラン」の指導者の一人でもあった黄色民謡歌手の伊藤多喜雄氏からこの話を聞いた私は、即座に映画化を考え、その方法を模索した。何しろ低迷を叫ばれる日本映画界の昨今、資金繰りも配給問題も、実現のためのハードルは、既々製作者側にとって容易なく発重にも取り囲む。

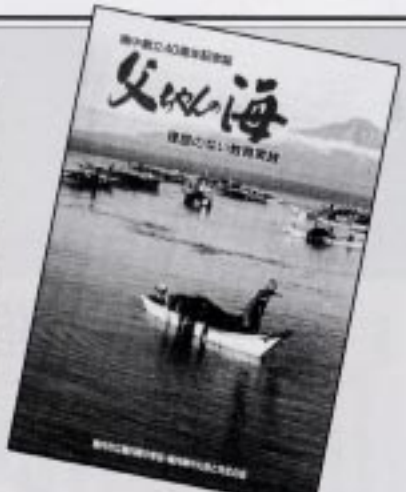
そんな中で伊藤氏に勧められて観たテレビドキュメンタリーが古くから友人でもあり、製作姿勢が極めて私と近いプロデューサーの高橋氏の目に止まり、一挙に映画化への道が開けた。

イジメ、非行、暴力。現代の日本の社会情勢と深く関わり合う問題点を人々がどう対応し、どう行動したか。これは決して――椎内市だけの問題ではない。その一つのシンボルとして、「南中ソーラン」の問いかける意味は大きい。

〈主な代表作〉

1959年　記録映画「能」で、監督としてデビュー。
「初恋」「毎日映画コンクール記録部門」、「炎の男」「内海の輪」、「津軽じょんがら節」キネマ旬報ベスト・ワン、「毎日映画コンクール作品賞」、「首飾」、「竹の夢二物語」、「赤い山脈」、「人間の砂漠」「日刊スポーツ映画大賞」、「望郷」「毎日映画コンクール」、「華岡青洲の妻」「日本アカデミー賞」、「華岡青洲の妻」「日本アカデミー賞」等がある。
その他、記録映画・テレビCF・舞台演出等も数多くこなしながら、サントリー・テレビCMでは、「第8回カンヌ国際広告祭」を受賞している。
1973年　芸術選奨文部大臣賞を受賞
1994年　紫綬褒章を受ける

原作「父ちゃんの海」の背景



本映画「椎内発―学び屋」の原作となった「父ちゃんの海」は南中創立40周年を記念して平成元年5月に、椎内市立椎内南中学校と同校の父母と先生の会が共編された出版物です。同書には、それまでに至る父母と教師が一体となって地域ぐるみで、「荒れ」の問題に取りくんだ昭和55年からの10年間に及ぶ記録が収載されています。

その見出しは、「信頼のなかった教師と学校」にはじまり、「父母の叫び／これは学校ではない」「逃げ腰、負け犬根性」の教師たち」「お父さん、うちには転勤がないの」といった様々な現実の記事が目に飛び込んでまいります。しかしやがて、「荒れの根底は「いじめ」だ／克服の第一歩」「学び合いすべての子どもに基礎学力を」、そして「ソリもバーマも力いっぱい走った」「南中生でよかった」とはじめて思った文化活動発表会」といった明るい記事に至ります。そこには、親も教師も、子どもとともに真剣に学び合って育つという、「共に育つ学び合い」の歴史が勇気をもって描かれています。

実は現在の「南中ソーラン」が生まれるのは、その後。平成4年夏に伊藤多喜雄さん、秋に春日喜升さんに出会ってからのことだそうです。

初出場の平成5年正月の日本民謡民舞大会で奨励賞。翌年大賞受賞。今では「南中ソーラン」は北海道中の人気者となりました。（昨年は、初代メンバーに、何とお子さんが一人誕生。数年後に、可愛い南中ソーランの姿が街中のまなざしを集めるかも――。願わくは、地域の伝統文化再生の良きシンボルになって欲しいものですね。）

長い地道な、椎内の街ぐるみでの共育環境創りこそ、この映画のテーマです。それは、学校崩壊は地域崩壊に起因する――という深い洞察に始まった地域の歴史です。

南中ソーランの毎年の発表会の日は、親元は無論を船から降ろし、地元企業の社長は社員を休ませて、父親たちを会場に集めたそうです。問題がすべて解決した訳ではない。けれど、私たちはきっと大丈夫。随分と足腰が丈夫になりましたから…。と胸を張る地域の皆さんの言葉こそ、本映画の原作なのです。

＊本映画完成直後の5月2日。椎内市にて2500人の市民の方々に全国初の感謝の試写会を開催。映画終了直後に、椎内南中学校の生徒さんたち同士が、「この映画は、ただ「面白かった」じゃだめな映画なんだ。大人たちが、僕たち（中学生）がおかれた現状にどれだけ目をむけて、考えてくれるかが大切なんだ。撮影は本当に大変で、もういやになったけど、でも僕たちにもできることは頑張って（上映運動を）手伝っていこう。それが（撮影と同様に）いい思い出になればいい。」

――と、話し合ってくれたと報告をうけました。

私どもは正直驚きました。本映画のテーマの本質を、大人たちは上に、子供たちが正確に受け止めていてくれたからです。

夢を信じて いま心がひとつになる

あなたは子どもたちの本当の心をいくつ知ってますか？
子どもたちの笑顔を、涙を、怒りを、一つひとつ
一人ひとりのあなたに問いかけたいのです。

『映画の最初は、
日本最北端の画面も、そして内容も寒すぎて…
けれど終わってみたら、私の中に
あたたかな、何かが生まれていました。
そんな自分に気づけたことがうれしくて、
同時に、何だか生きる勇気が湧いてきて…
だから、どうしても皆に観せたくなりました。』
そんな、たった一本の電話から、
そんな、たった一人の決断から、
全国各地での上映運動がスタートしたのです。
今、子供たちの真実を観つめようとする
地域の輪創りが始まっています。
『本気で！一緒に！』が合言葉です。
光る子供たちが、
そんな地域の眼差しから生まれ来るとー
夢を信じる大人たちも、今輝き始めているのです。

昭和60年代・北海道
日本最北端の街、稚内…
稚内市立稚内南中学校で
実際に起きた出来事をもとに、
再構成された物語である。

〈解説〉

今、中学生問題で日本中が衝撃を受け、深く傷ついています。しかし、『イジメ・ナイフ・登校拒否』などの学校崩壊現象は、実は、私たち大人社会の矛盾が、社会的弱者である子供社会に投影された姿ではないでしょうか。だとすれば、私たちは今、何をなすべきなのでしょうか？　かつて、日本一荒れた学校の生徒が、全国民謡民舞大会で日本一になりました。それは、日本民謡舞生の旗手、歌手伊藤多喜雄さんのソーラン節と、振付指導の舞踊家春日舞升さんの献身的な協力による実話です。しかしその陰に、子供たちの豊かな心の成長を願う、稚内市の大人たちの、地道な『共育環境創り』の努力の事実があったのです。親も教師も、子供とのふれあいを通して一緒に学び合い、自らも本当の親・教師に育とうと模索しあった歴史です。だから、共に育ち学び合うそんな心の環境の中で、やがて子供たち自身にも一緒に成長したいという自覚が芽生え始めました。私たちの生活には今、そんな地域ぐるみの、親も子と共に育つ『共育の場創りの意志』。つまり『学び座の挑戦』こそが必要なのではないでしょうか。子供が光れば、親も光る。これは稚内の人々が、たくましい学び合いの教育風土を根付かせるに至る、実際にあった、苦、今も継続中の感動の人間ドラマです。そして、実際の稚内南中学校の生徒／PTA／教師の皆さんの全面協力・出演を得て製作された映画です。そして共に学び合う『心の学び座』の再生を願う、全国のすべての方々に捧げる、稚内発の問いかけの映画でもあります。

〈あらすじ〉

昭和60年代。当時、校内暴力で『日本一荒れた学校』と報道された学校が日本最北端の街にあった。その稚内南中学校の校長（田村雄吾）は、教師神崎（渡瀬恒彦）と二人で非行に立ち向かおうとする。しかし、その神崎さえも非行グループから集団暴行を受けてしまう。一年前、信之（徳山秀典）と恵美（安達祐実）は、漁師の父を同じ海難事故で失った。その恵美に心を寄せていた信之は、恵美が恐喝にあい、ついに刃物をもって非行グループのボスに挑む。しかし、逆にその刃物でさされ足に後遺症を残してしまう。そして、恐喝されていた子の親たちが、非行グループの親たちの家に押しかけ衝突。大人同士さえも険悪となる。嘆く信之の母（田中好子）と、怒る恵美の姉悦子（小島聖）。そして、転校を決意する恵美。さらに、いじめられっ子グループが学校を集団で脱け出し、神社の社に立てこもり、父母・教師たちに悲痛な抗議をする。『イジメる奴も嫌いだけど、何もしてくれない、先生、父ちゃん、母ちゃんも大嫌いだ！』『先生も信用できないけど、僕たちは親も信用できないんだよ…！』ついに、校長以下教師全員が、父母たちに学校再建のため、街ぐるみの協力要請をする。一方神崎は郷土芸能部の生徒たちに、地域文化を理解させようとソーラン節を勧めたものの、生徒たちのノリは悪い…。が、やがて思いがけない変化が訪れ始める。そして、ついに、誰もが想像さえしなかった感動的な出来事が、稚内全市を震わせる日が訪れる…!?

製作 JTAキネマ東京 ◆特別協賛 ジャパントラスト アソシエイション◆協賛 Food Human ◆協力 ANA
製作 齋藤浩・高橋松男◆企画 高橋松男◆プロデューサー 萩原正夫・古屋和彦◆脚本 斎藤耕一・古屋和彦◆音楽プロデューサー 金子洋明◆音楽 倉田信雄
原作「父ちゃんの海」稚内市立稚内南中学校・稚内南中父母と先生の会 共編◆上映プロデューサー 野辺忠彦
「親が変われば子は伸びる」横山幸一・坂本光男 共著（明治図書出版）/参考図書 学習研究社 中学二年コース［学び座の挑戦］
テーマ曲「TOGETHER」歌 森山良子・玉置浩二/作詞 森山良子/作曲 玉置浩二◆編曲 玉置浩二・藤井丈司/ストリングスアレンジ 萩田光雄
後援 稚内市◆製作協力 稚内市立稚内南中学校・稚内市立稚内南中学校製作協力委員会・稚内市立稚内南中学校PTA
撮影 森 陸吉●照明 加藤松作●録音 本田 孜●美術 山田好男●編集 阿部嘉之●記録 恩原繁子●助監督 曽原和利●振付 春日舞升（春日流二世）
●プロダクションマネージャー 高橋雅宏●プロデューサー補 深水真吾●制作担当 中沢直
挿入歌「TAKIO's SOHRAN 2」唄 伊藤多喜雄/演奏 TAKIOバンド/作詞 伊藤多喜雄/編曲 伊藤多喜雄&TAKIOバンド

映画『学び座』に寄せられるメッセージ TOGETHER

内発学び座 上映・講演会

■町村信孝前文部大臣

「いのち」。これは人間に限らず生きとし生けるものすべてを通じかけがえのないものであり、いのちの大切さを教えることは教育の原点であると考えます。そして、未来に向かって生きる子どもたちに夢を与え、すべての大人たち、子どもたちがこころから感動しつつ、共に生きるなかでいのちをはぐくむことは、本来わたしたちが地域で粛々と受け継いできたよき文化でもありました。荒れる学校を目の前にして、いまこそ私たちは教育の原点に立ち返り、学校、家庭、地域社会が一体となって、「こころの教育」を推し進めなくてはなりません。映画「学び座」は、私からの緊急アピールを踏まえ、ひとつの夢を求めて親も子も共に育つ地域ぐるみの共育環境創りを世に問いかけるという視点に立つ教育映画です。この映画が広げる共感の輪を通じて教育再生に多くの人たちが取り組まれることを願ってやみません。

■坂本光男（中央大学講師 日本生活指導研究所長）

―希望と勇気がわく―

北海道・宗谷の『子育て・教育運動』は、日本の最先端をゆくものといってよいでしょう。地域の人や教師たちのその教育協同は、じつに多くの教訓をふくんでいるからです。私はそれに魅せられて、もう一〇〇日以上も宗谷の人たちと学び合ってきました。

この映画は一つの学校をモデルにしていますが、描かれている感動と教訓は宗谷のすべての人によってつくり出されたものといえます。まさに衆知・衆力によって生み出された映画です。

なかでも圧巻は、子どもたちの限りない可能性が映し出されていることです。大人たちの共同の支えがあれば『どの子も伸びる』ということです。大人たちの共同の支えがあってこそ、すべての人がこの映画をみて希望と勇気をわかせてほしいと思います。

（原作「親が変われば子は伸びる」の著者）

全国の方々からのメッセージ

上映終了後、すばらしいアンケートが寄せられ、そして近隣の街に上映運動の輪が広がる原動力になっています。

●大人たちが少しでも子供の気持ちをわかってくれるようになったらいいな。（小学5年生女子）

●この映画を見て、いじめはとても悲しいと分かった。いじめは絶対してはいけないんだ！（小学5年生女子）

●皆で協力しなければならないことを、一生懸命やるとすごく楽しいので、協力って大切ですね。（中学2年生女子）

●とてもためになるいい映画だが、皆で見なければ、ためにならない映画だと思う。（中学2年生男子）

●生徒・教員・PTA・地域が一丸になれるんだなあ…。すてきな映画を有り難う。私も中学の時にこういう体験をしたかった。（36歳女性教師）

●公立中学が荒れているなら、我子を私立へと考えていた私の教育観を根底から覆してくれた映画です。（35歳母親）

●何かすると目立つ。それがイジメに繋がるのは親も同じです。『何もしない親』考えさせられました。（38歳母親）

●もう母と子だけではだめだな。母だけではもうストレスいっぱいです。お父さん―出番です！（38歳母親）

●地域の子供を見る私自身の目が変わりました。（40歳母親）

●映画と違い、実際には大変な努力の月日があったことでしょう。私も頑って、また子供達と生きていきます。（40歳女性教師）

●学校を良くする事は、地域の人間関係を良くする事。それは、ごく普通の人々が少しづつ力を合わせて、初めてなされる事だと、改めて認識しました。（41歳大学教授）

●映画の子供達の眼を見て、自分の子供達の眼にもこんな輝きを見たいと思いました。一見表面は落ち着いている子供達や学校に、少し不安を感じている私です。（40歳母親）

●悪い子も、良くなるためにしゃがんでいる状態だーと、気づかされました。人生はすばらしい。（44歳父親）

●『先生が地域を好きになる。町の方が学校へ足を運ぶ。愛情だけではだめ、夢を。そのためのきっかけ作りを皆で行う。』たくさんのキーワード有り難う。一時の感動で終らせず、この中で何ができるのか考えます。（45歳父親）

●子供のパワーを受験勉強に向かわせている世の中は何かおかしい。映画の子供達の眼の輝きに感動。（45歳母親）

●荒れている子供が怖い私でした。でも彼らは自分を表現したくて絶叫して、それが暴走行動化していただけ。秘められた子供達のエネルギーがプラスに変わるときのすごさに圧倒され、魅せられてしまいました。（匿名教師）

●いじめる方もいじめられる方も、皆一人一人の存在があるから、見て欲しい・認めて欲しいのですね。（50歳母親）

●人の輪が重なれば、先が見える――。感動でした。（59歳母親）

●一番感じたことは、『なぜ子供達が堕落していったのか』ということです。それはやっぱり、家庭での子供達の生活が一番なんだと痛感しました。そして子供に目標を持たせることも。映画「学び座」では、はかり知れない勇気と希望をいただきました。これからも毎日元気をもって育児に励む所存です。（38歳父親）

■帯広市の高校生発（学生による上映運動責任者）

帯広市では高校生たちが上映運動に呼応してくれました。私たち高校生が、『学び座』を自分たちの力で上映することにより、私たち自身の問題である非行・いじめに立ち向かうと共に、親や先生方にも、この映画を見たことが、問題解決するためのきっかけになってもらいたいという願いをこめて、「学び座」上映学生実行委員会を立ち上げました。第1回目の実行委員会では、全員で上映の目的を再確認しました。実行委員はまだ9人しかいませんが、これからもっとたくさんの高校と協力し、自分たちでやりとげることのすばらしさを味わって行きたいと思います。

（『学び座』上映学生実行委員会）平田佳織

映画「学び座」は、まさに、子供たちが大人たちに。そして、学校が地域に観てほしい映画なのです。

平成10年）5月1日　金曜日　朝日新聞（夕刊）

それは、ソーラン節から始まった

荒れた学校、再生 全国へ 稚内発

南中学校の試み 映画化

稚内市で二日、市内の中学校で実際に起きた出来事をもとに作られた一本の映画の試写会があった。テーマは、学校の荒れと再生。製作に学校側が全面協力し、かつての「きず」をさらけだした。そのお礼を込めた、全国ロードショーに先立つ試写会だ。映画を撮った倉橋耕一監督は「勇気のわく映画だ。悩んでいる全国の学校関係者に見てもらいたい」と話している。

「稚内発『学び座』――ソーランの歌が聞こえる」（TBSキネマ東京製作）。モデルになった稚内市立緑の市立稚内南中学校（新井義徳校長、生徒四百七十九人）は一九八〇年代、多い年には年間五十人の生徒が警察に補導された。稚内署の資料によると、恐喝、シンナー、万引き、傷害事件など様々な事件が頻発した。市民から「日本一悪い学校」と陰口をたたかれたこともあったという。

八〇年代に同校で学年部長を、現在、宗谷支庁豊富町立豊富中学校の二階堂興校長は「南中の校区は漁業関係者が多い。二百ヘクタール行による水産業の衰退で親が失業したり、個々家庭が多く、親子で心がすさんでいた」と振り返る。

荒れが頂点を迎えた八五年、南中生は子供だけの問題ではない、と学校と父母が協力して様々な取り組みが始まった。土台は文化活動からと、地域に根づいたニシン神楽げ音頭の保存会の長老に歌と踊りの指導を仰いだのが、ソーラン節との出あいだった。

最初はぎこちなかった正調のテンポに生徒ののりは悪かった。そんな時、ロックミカルな民謡歌手伊藤多喜雄さんの「ソーラン節」を教師が知り、テープを生徒に聞かせるとがぜん興味を示した。

九一年には伊藤さんが来校し、生徒たちに歌と踊りを指導した。さらに踊りの質を高めるため、伊藤さんが知り合いの舞踊家を九州から招いて、最北部の厳しい風雪、荒波、カモメなどを表す振り付けし、精神を重ねて「南中ソーラン」が完成した。

踊りの上達とともに自負心と目的意識が育ったのか、校内暴力はいつの間にか姿を消したという。

九三年には、東京のテレビ局主催の日本民謡民舞大賞大会でグランプリを獲得するまでに成長、札幌で毎年開かれるYOSAKOIソーラン祭りには、一昨年から三年生百六十人が全員が参加している。今では生徒の手でほとんどが振付けされており、踊りが近づくと体育館の窓ガラスなどで生徒たちは自主的に練習している。

映画はこの経過を一人の女子中学生の目でたどる。主演は公募抜擢で、校長役は竹村高廣。現在の生徒たちも出演している。

「原始のソーラン」や「郷愁」「港町しょんがら節」の音楽は、藤井一監督がこの話を聞き、映画化を思い立った。一番初は本当かと思ったが、足を運んで確かめ、再生に取り組んだ地域ぐるみの力に感動した。かつて荒れた学校だったことをさらけだして協力してくれた学校の勇気にも敬意を表した」と話す。

今年二月にクランクインして三月まで稚内市内でロケがあった。二月二十二日、稚内市街の下の海岸で吹雪の中で撮影されたラストシーンは、ダイナミックな踊りを披露する新三年生たちの自信にあふれた姿を映し出している。全国ロードショーは今秋からだ。

朝日新聞98年5月1日

現在も本上映運動を報道する新聞記事が全国各地で相次いでいます。

夢は時代さえ変えてゆける強い力

この映画の話題は今多くの方々に共感の輪を広げています。
音楽界では、森山良子さんと玉置浩二さんが協力を申し出て、お二人のデュエットによる「TOGETHER」というすばらしいテーマ曲を提供して下さいました。

共に育ち共に学び合う「学び座」への讃歌として、「夢は時代さえ変えてゆける強い力。」と、日本を代表するお二人の夢の歌声が、きっとこの映画上映運動に新しい力を吹き込んでくれることでしょう。

TOGETHER

歌／森山良子・玉置浩二
作詞　森山良子／作曲　玉置浩二
編曲　玉置浩二・藤井丈司
ストゥリングスアレンジ　萩田光雄

もしも心がうつむく時は
胸いっぱいに大空を仰いで

きっとどこかであなたを照らす
輝く星をさがそう

夢は時代さえ　変えてゆける強い力
求め合う心　今ひとつに重ねて
めぐりめぐり来る　時に架ける虹の橋を
築いてゆこう　明日を歌おう　愛を歌おう

おぼえてますか？　はるかな夢に
日付け刻んだ　幼いあの日を

進む勇気と　捨てる勇気を
君の涙が　教えた

たとえこの道が　長くけわしい時にも
出逢いはいつでも　新しい未来開く
めぐりめぐり来る　時の風に吹かれても
いつの日も　夢に向かい　歩いてゆこう

夢は時代さえ　変えてゆける強い力
求め合う心　今ひとつに重ねて
めぐりめぐり来る　時に架ける虹の橋を
築いてゆこう　明日を歌おう　愛を

いつの日も　夢に向かい　歩いてゆこう

去る平成11年1月20日、映画『学び座』完成発表会完成披露試写会が、国立教育会館・虎ノ門ホールにて開催されました。両会には、日本PTA連絡協議会会長松井石根様、青少年育成国民会議副会長上村文三様、稚内市長敦賀一夫様はじめ、全国からの地域実行委員の方やたくさんの団体の代表の方々がお見えになりました。

そして、皇太子同妃両殿下もご来場下さいました。さらに映画ご鑑賞後、関係者とご懇親会の機会までもって頂きました。これまで、当社製作の映画完成披露試写会に、皇室の方において頂いたことも幾度かございましたが、この度の懇親会は初めてのことでした。このような、格別のお計らいも、きっと、映画『学び座』上映運動の趣旨にご賛同賜ってのことかーと、関係者一同感激いたしました。
両殿下からは、御激励のお言葉を頂戴いたしましたことを、映画製作関係者、及び本上映運動にご協力頂いているすべての皆様方に謹んでご報告申し上げます。

さて本試写会は、地域上映運動が先行したため、初めての公式試写会となりました。舞台あいさつでは、監督・出演者のご挨拶に引き続き、次のような、稚内南中学校の生徒さんからのメッセージが読み上げられました。

みなさん、本日はこの『学び座』の試写会に来てくださり、誠にありがとうございました。
僕たち3年生もこの映画の撮影に参加し、映画の撮影の大変さを学び、そして僕らが今までソーラン節がどのようにして生まれ、どのようにして南中生とソーラン節が今日まで支えられてきたのかということを学びました。
これは僕らにとっても、いい経験になりました。
残念ながら僕らがそちらへ行くことができませんが、全国の人が一人でも多くこの映画を見てくれるよう、南中生みんなで応援しています。

〈稚内南中学校　生徒会長〉牧野孝之

また以前から楽しみにされていた文化人や、報道関係者も含めた方々に、やっと鑑賞頂くことができ、大盛況の内に無事終了いたしました。そしてたくさんの方から、映画の感想アンケートと、上映運動参加のお申し込みが当社に寄せられています。うれしいことに、色々な全国組織の方からの協力のお申し込みも寄せられており、現在、準備中の地方の地域実行委員会への、参加・協力者が本格的に増え始めました。
本当に本上映運動は、心ある皆様方に支えられてのものだと改めて、思いを新たにいたしました。

稚内発 地域上映運動へのご参加をお願いいたします。TOGETHER

讀賣新聞
THE YOMIURI SHIMBUN
EVENING EDITION (日刊) 第43782号
3月14日 土曜日 1998年(平成10年)
読売新聞社

98年3月14日読売新聞
一面トップ記事にて
本映画の製作ニュースが
報道されました。そして…。

毎日新聞98年4月9日

荒れた中学"再生"映画に

ソーラン節も一役

稚内南中で映画化に取り組む生徒たちと斎藤耕一監督、安達祐実さんの密着する

父親参加、生徒動かす

稚内南中 地域ぐるみで

北海道稚内市に、日本一荒れているともいわれた中学があった。生徒の間から民謡のソーラン節を取り入れ、踊りで校内暴力を克服しようの動きだった。学校のPTAの全面協力で映画化されている。関係者は「この教訓が少しでも荒れた学校の問題を考える糸口になれば」と期待している。

タイトルは「父ちゃんの唄」。ソーラン節の歌が聞こえる。（俳優）・「俺の意地」を知らない青春群一監督（69）が手掛けている。モデルとなったのは市立稚内南中学校。一九八〇年代、授業中でも生徒が平気でたばこを吸ったり、暴走、暴力事件が多発、教師への殴りも絶えなかった。

しかし、教師やPTA、地元の人たちの熱心な取り組みで次第に暴力を沒滅していった。その中、大きな力になったのは、民謡歌手田端義夫さん（87）の歌うソーラン節にちなんだ踊りの、南中ソーラン節」だった。

同校にはもともと郷土教育という課外クラブがあった。生徒たちは授業の延長には全く興味を示さなかった。ある日、指導教諭の一人がロックのように激しいリズムの伴奏さんの歌を聴き、生徒たちに聞かせたところ「すごくカッコイイ」と興味を示し、プロの指導を受けて、躍動的なひびきを使たちと一緒に作れ、自信を物語、PTAも出た。それが生徒たちの心をとらえ、全校でこの踊りに取り組むようになった。

踊りは次第に校内暴力の沒滅、学校の雰囲気を変えていった。

友人の伊藤さんからの話を聞いた斎藤監督はこぜひ映画化したい、と思ったという。

映画は四月末に完成、五月に地元・稚内市市内の全中学生と親たちを招いて試写会を開く。金曜公開は今年秋の予定。

トピック最前線

ソーラン節で心一

自負心と情熱育つ

荒れる学校の再生を映画化。ソーラン踊りで生徒の自負心を育てた稚内市立稚内南中学校

本上映運動の発端は、昨年3月読売新聞の一面トップのカラー報道。4月の毎日新聞。5月の朝日新聞。そして数多くの地方紙・雑誌の相継ぐ報道を読まれた全国各地の方々からの問い合わせに始まりました。個人・PTA・行政・団体等様々な方からですが、その内容は皆一様でした。「地域全体で、教育環境の再生に取り組むために、ぜひこの映画を貸して欲しいのです。」という異口同音の、荒れた教育環境を憂う真剣なお声でありました。

そこで、何とかそんなお声にお答えしたいと現地に飛び、ホール、会議室、ときには夜の学校の教室等で試写会を開催、協議を重ね、次のような趣旨確認がなされました。

※これはまさしく、「子供が大人たちに」「PTA・学校か地域に」観て欲しい映画だ。何故なら荒れの現実は、もはや学校だけの努力の範囲を超えているからだ。

※劇場鑑賞では、どんなに感動しても観客は再び集まれないが、地域の自主上映会なら、継続した集まりを可能とするはず。一過性の鑑賞会ではなく、教育環境再生の、キッカケとなる地域上映運動としたい。

※学校崩壊の原因は、地域文化の崩壊にある。垣根のない開かれた運動とし、教育関係者だけでなく、広く地域の団体や、父親が動める企業にも参加を要請する。

※開催後、運営議事録・アンケート・会計報告を地域に公開し、近隣への広がり、または将来の再上映会実施の際の有効な資料としたいー、等々でありました。

それは、今まで私どもが「典子は、今」「ビルマの竪琴」「次郎物語」「ケニー」「螢川」「一杯のかけそば」等々、常に心の時代を問う映画を創ってきた趣旨と同じでした。故に劇場公開を延期。上映運動参加事務局の設置を決定。

こうして昨年7月4日の高知市の西部中学校上映会を皮切りに、現在では全国に200を超す実行委員会が誕生。宗谷・釧路・瀬戸内諸島等では広域連続上映会が。帯広市では女子高生による学生実行委員会が。静岡ではTV局・劇場主唱の実行委員会が。また多くの自治体で新年度予算を計上。関連諸団体との協賛事業化も推進中です。

ホール上映会場では、先生や地元企業社長やお役人たちが一緒に働く光景が来場者に感動を生み、荒れた中学では騒々しい会場を、生徒同志が静粛にしてくれました。上映終了後、映画の通りにトイレ掃除を始めるPTAや、荒れた授業の公開を決断する学校も現れ、また進学する中学で観た小学5・6年生児の父母から「地域で生きる大切さに気付きました。私立校に進学予定でしたが、やはり地元中学にいかせます。」とのお声も届いています。

また全県と全市に、本映画後援を申請中です。当事務局解散後も、上映運動を地域全体で円滑に進めて頂きたいからです。（本映画にエンドマークはございません。）上映会場で生まれる感動共有の熱い歓び。それこそ、受け手の皆様と、私共送り手との共同作品です。心の時代を願う皆様からのご連絡を、謹んでお待ち申し上げます。

地域発信"学び座"上映参加運動推進中『お問い合せ先』

JTAキネマ東京 映画部 上映運動参加事務局
※本上映運動への皆様のご賛同のメッセージをお待ちしております
〒160-0023 東京都新宿区西新宿3-1-3 JTAビル9F(TEL：03-5322-4001／FAX：03-5322-4010)